

まるで魔法のようだ。天満切子についてお話を伺おうと切子工房「昌榮」を訪ねると、切子師の西川昌美さんが「まずはご覧下さい」とにこり。西川さんが天満切子のガラスに水をとくとくと注ぐに従って、ガラスの底の模様が徐々に側面に映り、万華鏡のようにキラキラと輝き出した。「これが、天満切子の魅力なんです。U字型の丸い刃で削った側面に、底の模様が映り込み、光の屈折で美しい模様を浮かび上がらせるんです」

切子というと、細かな細工をほどこした薩摩切子や江戸切子を思い描く方も多いと思う。V字型の刃によるシャープなその細工は確かに美しいが、飲み物を注いでも前述のような映り込みの変化が出現することはない。一方、U字型またはかまぼこ型と呼ばれる刃でカットする天満切子の細工は、一見、シンプルにも見える。ただし、飲み物を注いだときに映し出される、複雑な模様の美しさといったら！「使ってもらってこそ美しさ

が際立つというのが、天満切子のステキなところ。鑑賞の美だけでなく、用の美をあわせ持っているのが天満切子です」と西川さん。確かに、天満切子に日本酒などを注ぐたび、飲むたびに、誰もがワクワクしそうだ。

現在の大阪・天満からは想像が付きにくいのが、かつての天満はガラスのまちだった。その痕跡を示すように、大阪天満宮の正門脇に「大阪ガラス発祥の地」の石碑がある。江戸時代に長崎の商人・播磨屋清兵衛が大阪にガラスの製法を伝え、明治、大正時代には、大阪天満宮周辺に多くのガラス工場やガラスの加工場が軒を並べた。昭和に入り戦争で空襲に遭っても、「ガラス屋は割れたガラスを溶かして、またつくり出すことができるので再開が早かったと聞いています」と西川さんが言うほど、ガラスで栄えたまちだったのだ。



天満切子師

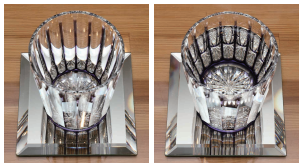
西川昌美さん



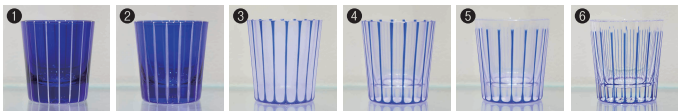
1974年生まれ。天満切子の生みの親である 宇良武氏とその兄・榮氏に師事。武氏とは、氏が亡くなるまでの約12年間、仕事を共にする。天満切子が誕生し当初は、シンプルな線による模様が中心だったが「天満切子ならではの線や柄を活かして、さらにさまざまな模様が楽しめる、よりステキな天満切子にしていきたい」と思っており、作品をつくっています。



磨き粉となる泥をつけながらコルクで磨くと、半透明だったガラスが、つるつるピカピカの透明のガラスに生まれ変わっていく。



天満切子のガラスに水を注ぐと、キラキラとした模様が浮かび上がり、万華鏡のような輝きを放つ(写真右)。ガラスの底に入れた菊の模様が、U字型に削ったガラスの側面に映り込むことによる。写真左は、水を入れていない同じガラス。



天満切子の製作工程は、ペイントマーカーで基準となる線を引く「割出し」①。その基準となる線をまず細く削り②、U字の刃を使って「粗削り」を行う③。「砥石」をかけて、色のバランスを見ながらデザインを微調整④。その後、模様を入れ⑤、透明になるまで磨き上げる⑥。



切子工房 昌榮
大阪市北区西天満5-14-7 和光ビル103
TEL. 06-6131-0100



「天満切子をもっとステキなものに」という西川さんの思いがこもった、楕円模様を組み合わせてデザインされたガラス(写真左)をはじめ、おしゃれな天満切子が工房内にいっぱい！

ガラスに美しい模様が映り込み、 使うたび、万華鏡のように輝く天満切子



天満切子の最大の特徴は、ガラスの側面をU字型に削っていくこと。薩摩切子や江戸切子で使われるV字型のシャープな刃ではなく、U字型の刃を使ってガラスの側面にU字の凹みをつけるように大胆に削っていく。写真の工程は、「粗削り」。「技術を身につけるといのは、自分の感覚でできるようになること。そのためには、数を削って自分のものにしていくしかないですね(西川さん)」。

ところが、昭和40年代後半になると消防法の規制や輸入ガラスの増加によって工場は閉鎖していくことに。さらに、西川さんの師匠である宇良武一氏のガラス工房も仕事を請けていたガラス商社・カメイガラスが約30年前に廃業。天満のガラス産業は衰退へと向かうばかりだった。そんなとき、宇良武氏は「天満はガラスで栄えたまち。ガラスの文化を消したらあかん」と一念発起。試行錯誤のうえ、他にはない新しい切子の形、映り込みを特徴とする天満切子を生み出すことに成功したのだった。

天満切子の誕生をきっかけに、天満切子を広めようと2001年に宇良武一氏が開いた教室に通い始めたのが、西川さん。「天満切子を自分の目で見たとき、『これをつくりたい!』と心の底から思いました」。教室に通い始めて1年ほどすると「仕事として関わってほしい」と声をかけられ、武氏とその兄の榮氏のもとで修行を始めた。「すぐ近くに2人がいらっしやうたから、常に技を見ることができました。じーっと見て、それでもわからないことは、どうすればいいか教えてもらう。そうやって技を覚えていきました」

それから数年後のある日、西川さんは師匠・武氏から切子師としての名前が入った落款をもらう。「昌榮」という落款だ。その時すでに故人となっていた榮一氏の「榮」と西川さんの名前の昌美の「昌」を合わせた「昌榮」は、兄・榮一氏の仕事を知っているのは西川さんだけだからという武一氏の思いが込められたものだった。2017年に西川さんが独立・創業した、切子工房「昌榮」の屋号でもある。

シンプルだからこそ、存在感のある線を

天満切子は、色被せガラスという透明なガラスに色ガラスを被せた分厚めのガラスを使う。U字型の刃で削り、

色部分と透明部分のコントラストで、まっすぐな線や楕円を描いて模様をデザインするのが、天満切子の基本だ。「まっすぐな線を削るというと、ただか線一本と思われるでしょう。けれど、この線一本がしっかりと存在感のある線でなければダメなんです」。シンプルな線だからこそ、ほんの少しでも曲がっていたり太さが揃っていないかったり、線に迷いがある“と非常に目立つという。「師匠の武一さんからは、『線の行き先を見て削れ』と教えられました。(下書きの)線をなぞるように削っていては、きれいな線にならない。どこまで削るかの到達点をみずすえて削るように」と。かつては師匠の存在感ある線を見て「同じ線なのに違うなあ」と思っていた。けれど今は、「すばっと迷いのない線、存在感のある線が自分も削れている」と確信できる。

もうひとつ、天満切子の美しさに重要なのが、最終工程の「磨き」だ。ガラスは、削りの段階ではザラザラと白く、砥石をかけてもすりガラス状の半透明。これを、一点の曇りもないピカピカの透明の状態まで磨き上げなければならぬ。「磨き砂に水を加えた泥をコルクにつけて、磨き上げていきます。泥で磨くって原始的でしょ(笑)」。薬品を使って仕上げる方法もあるが、あえて職人の感覚が必要とされる、磨き砂による手磨きにこだわる。「結局、磨きがきれいじゃないと、映り込んだ輝きが美しくないですから」

西川さんは、天満切子の基本を大切にしながら、デザイン性の高いオリジナルの天満切子を次々とつくり出してきた。最近では、ガラスの枠を超え、ガラスの照明などの注文もあるそう。「これからも、もっと美しいもの、もっと輝くものを追求していきたい」。同時に、天満切子をもっと知ってもらいたい、人材を育てていきたいと、切子教室も開催している。「師匠から学んだ天満切子の技術を、次の世代へつないでいこうと思っています」